

書評 『国際援助ビジネス』 『日刊サンサー』 9月-1990.09.00



## 受け入れ国の腐敗 日本の疑惑構造にメス

『国際援助ビジネス』

毎日新聞社会部 ODA取材班  
(並紀書房 一七〇〇円)

東京外国語大学教授

中嶋嶺雄

先般のヒューストン・サミットで日本政府は、第三次対中国円借款の凍結解除へとようやく漕ぎつけた。だが、西側諸国は、日本の対応に十分納得してとは思えない。そこまで日本政府が努力して、中国に円借款を供与しようとするのは何故なのか。

第二次円借款でさえ、中国側の政情不安や受入れ体制不全のためまだかなり未消化分が残っているというのに、何故それほど熱心になるのだろうか。さまざま疑問が残る。

それに、天安門事件の当事者である中国政府が何ら政策を変化させていないのに八一〇〇億円の円借款を新たに供与したところで、中国の社会・経済の改善に果たしてつながるのだろうか。私たちは、大学のゼミナールの夏合宿でも、この問題をとりあげているのだが、中国か

らの留学生たちも大部分が否定的な見方であった。

本書は、いまや経済大国のみならず、年間一兆二〇〇〇億円の規模で世界一の援助大国になった日本の「国際援助ビジネス」の実態を毎日新聞社会部の第一線記者が抉り出したものである。これまで ODA つまり政府開発援助というといわば金科玉条で、ODA 資金を増やすことこそ、日本外交の重要な柱であり、日本の国際化の一環であるとして一般には見做されてきた。

だが、本書を読むと、ODA にはそれに群がる族議員や企業の受注競争、受入れ国側での腐敗や疑惑が渦巻いていて、様々な問題があることが浮き彫りにされる。

本書の前半は、ミャンマー、南太平洋、島嶼諸国、インドネシア、タイ、中国、

フィリピンを対象とした、いわばケース・スタディである。ミャンマーでは、日本の商品借款で送られた自動車部品が軍用トラックに転用され、この国の民主化運動抑圧に貢献した疑いが指摘されている。

中国の場合には、中曽根首相の訪中（一九八四年三月）で決まった日中青年交流センター建設に関する疑問がとりあげられている。

後半は、日本側の疑惑構造にメスが加えられていて、インドネシアをはじめとする ODA ビジネスと政治家・渡辺美智雄氏の「影」や JICA（国際協力事業団）の活動についての様々な問題点が指摘されている。

巻末の座談会「ODA をどうするか」や資料も時宜にかなっていて大変役に立つ。

こうして本書は、これからさらに脚光を浴びるのである。ODA をめぐって、ほぼすべての問題を抉り出しており、きわめて有益な警世の書だといえよう。ただ、新聞連載という制約のためか、折角、疑惑の輪郭を描きながら、もう一步の追究とまでいたっていないケースが多い（たとえば「日中青年交流センターの顧末」の項）のは、惜しまれる。